

今治歴史散歩

大成 経 凡

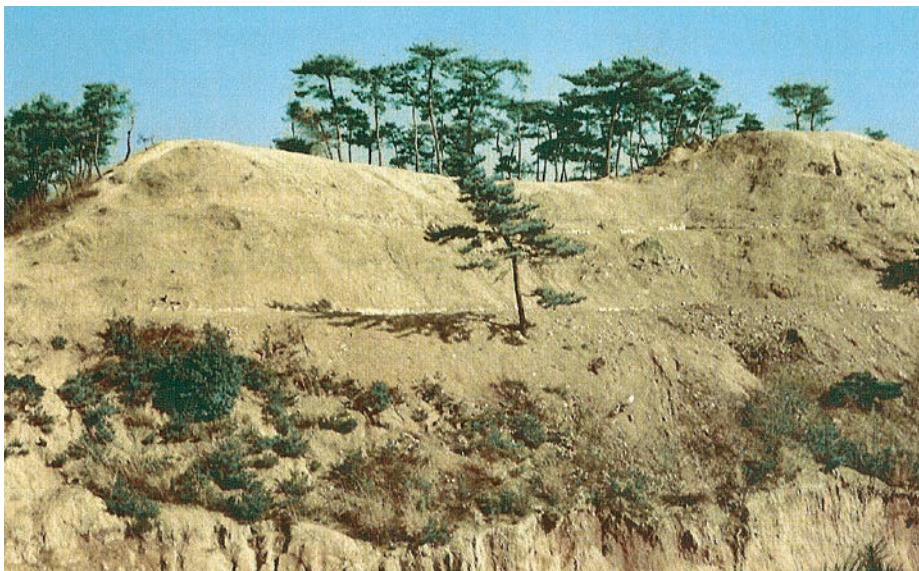
今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第二十二回は、来島海峡に臨む伊賀山丘陵で、古代から近現代にわたってランドマーク機能を果たした史跡・施設を歴史散歩したいと思います。

第二十二回

来島海峡をにらむランドマーク

●来島マーチスと相の谷古墳

現在、来島海峡を通航する船舶は、一日平均約五百隻といわれます。この海上交通管制を行う海上保安庁（国土交通省）の施設が来島海峡海上交通センターで、来島マーチスとも称されます。海上交通センターは海道の要衝に立地するため、東京湾・大阪湾・伊勢湾など全国に七か所しかありません。来島マーチスは平成十（一九九八）年一月から運用を開始し、来島海峡の海難事故防止に大きく貢献しています。



相の谷 1 号墳『『今治市相の谷 1 号墳出土遺物』（愛媛県歴史文化博物館／平成19年）図版より』

来島マーチスは、伊賀山丘陵の標高五五メートルに位置し、管制塔の高さは五五メートルあります。この施設をつくる際、人骨をともなう古墳が発掘されて話題となりました。同丘陵は今治市内でも古墳が集中する場所の一つで知られ、来島マーチスから少し歩けば、全長約八〇メートルと約五三メートルの前方後円墳に出会えます。これが愛媛県下最大の前方後円墳の相の谷一号墳と二号墳です。

相の谷一号墳の存在が明らかとなったのは昭和

四〇（一九六五）年のことで、正岡睦夫氏が発見しました。宅地造成で丘陵周辺の木々が伐採された際、予讃線の車窓から古墳の輪郭が現れたのです。愛媛県教育委員会では、同四十一年三月（後円部）と四十二年三月（前方部）に緊急調査を実施し、一号墳が葺石をともなう二段築盛の前方後円墳と分かりました。後円部の竪穴式石槨からは青銅鏡が二枚、丘陵からは多くの埴輪片などが見つかりました。

青銅鏡は中国後漢時代の禽獸画像鏡と国産のダニ（獣紋）鏡で、政治的権威の裏づけとなる威信財でした。これと朝顔形埴輪の特徴などから、畿内政権との関係性をうかがい知ることができます。築造は古墳時代前期の三世紀半ばから四世紀後半に推定されますが、被葬者は謎のままです。なお、二号墳については未調査で、一号墳の出土遺物は現在、愛媛県歴史文化博物館（西予市）に収蔵されています。

●小湊城と大浜灯台

相の谷一号墳の場所は、最も高い後円部墳丘が標高六〇メートルです。地元ではそこをコモンジ山と称し、海峡航路から見ると針路変更の目安（山立）になりそうな場所です。被葬者も、おそらくそれを意識した築造だったと考えられます。同墳からは中世遺物も多く見つかり、土器は湯築城跡（松山市）出土のものと同類します。実際、この丘陵から麓海岸の城慶寺（小湊）城跡とされ、その存在は原文書でも確認できます。

小湊城のある大浜浦は、来島村上氏の来島城下と

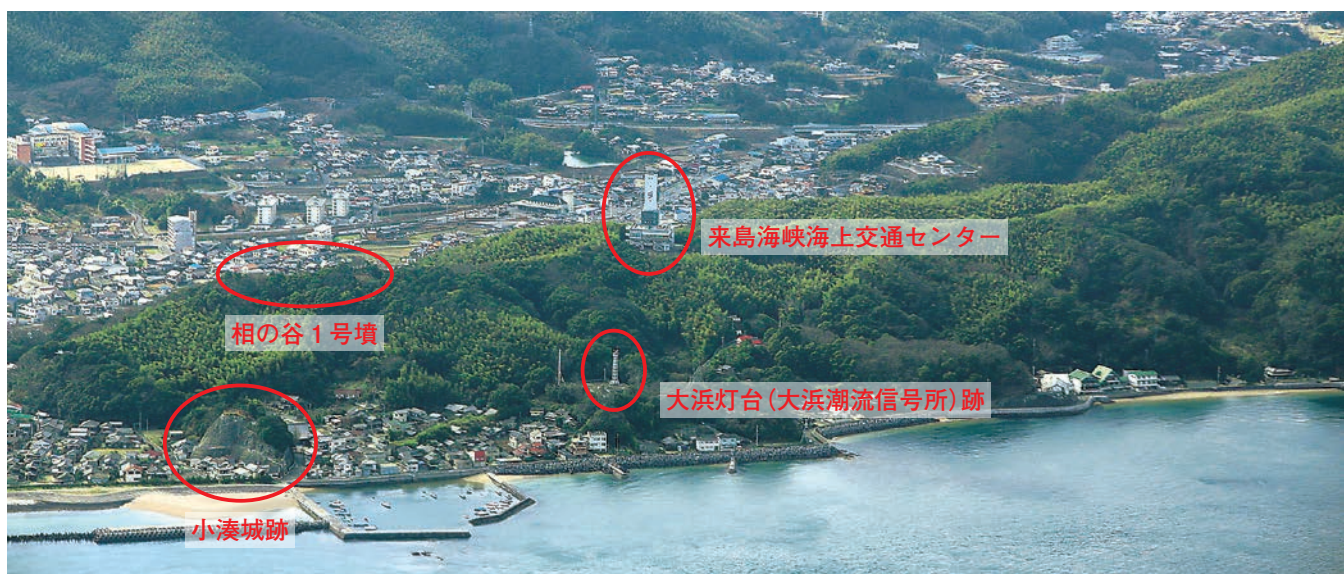


ありし日の大浜灯台（絵葉書より）

して、戦国時代末期に河野・毛利連合軍の焼き打ちに遭います（二五八二年／村上文書）。その後、豊臣政権下で伊予国の不要な城郭が取り壊しを命ぜられるなか、小湊城は存続させる一〇城の一つに挙げられました（一五八六年／浦家文書）。このため、後に藤堂高虎が今治城の築城を進めるなかで、繋ぎの城としてこれを重視しています（高山公実録）。小湊は、もともと港湾施設をとまなう来島海峡の拠点（今治津？）でしたが、周辺で湊新田・大新田な

どの新田開発が相ついでことで、しだいにその機能を失っていったのでしょう。

一方、小湊城が果たしたであろう海上交通管制の機能が、近代に復活します。明治三十五（一九〇二）年四月一日、伊賀山丘陵の中腹に大浜灯台が初点灯し、同時に小島沖のコノ瀬灯標も運用を開始しました。大浜灯台は、明治期の灯台の多くが石造であるのに対して、鉄骨造の構造でした。さらにこれより先、同三十三年四月二十日には中渡島灯台が初点灯します。当時、航路標識の整備は通信省の所管で、重要な航路から優先して洋式灯台が設置されました。今治地方では、布刈瀬戸八灯台の一つとして誕生した大下島灯台が最初です（明治二十七年五月十五日初点灯）。来島海峡の近代航路整備は、大浜・コノ瀬・中渡島の三灯台が鼎立することでスタートしました。現在、大浜灯台は失われ、これとの交代で昭和三十八（一九六三）年に新設された灯火式潮流信号塔も解体撤去されています。その機能は、平成二十四（二〇一三）年三月から来島マーチスに集約されました。管制塔を耐震補強し、新たに設置した電光表示板で潮流情報を通航船舶に伝えています。この時、中渡島潮流信号所の腕木式信号機も廃止されました。一方、平成二十二年から地元住民グループ「しまなみ海道周辺を守り育てる会」によつて、相の谷古墳の清掃活動が始まり、墳丘の見学が可能となりました。小湊城跡も、村上海賊の海城として脚光を浴びようとしています。



伊賀山丘陵全景（写真／来島海峡海上交通センター提供）